

研究大学の高大接続 英国オックスフォード大学の訪問調査から

濱 中 淳 子

早稲田大学教育・総合科学学術院教授

はじめに

日本の大学入試が大きく変わりつつある。本稿を執筆している2019年6月現在、目立ったトピックとしては、共通テストにおける記述式問題(国語・数学)の導入や英語民間試験の活用、eポートフォリオの導入といったものが挙げられようか。ただ他方で、いま少し時間を遡れば、数年前にも世間を賑わせた大きな変化があった。東京大学や京都大学における新しい入試の導入だ。2016年度入試から、東京大学では推薦入試を、京都大学では特色入試と呼ばれる推薦・AO入試を開始した。両大学がそれぞれ新しい入試の導入を発表した2013年、次のような説明がなされている。

高校段階から、特定の学問分野で自ら問いを発し考え成果を出したり、東大で何をやりたいのか明確な目的意識を持っていたりして、専門家をうならせる人材が必ずいる。筆記試験で入る層とは全く異なるタイプの力を伸ばしてやりたい。

東大は前期と後期で性格の異なる筆記試験をやってきた。後期試験は総合問題として良質の内容であると考えている。だが、合格者の大半を前期日程不合格者が占め、学生構成の多様化という面で顕著な成果が確認できていない。入学後の教育指導も前期・後期の差異は設けてこなかった。

新たな推薦入試を経た学生には、科類等の実情に応じ、例えば、メンター(指導者)を付け、駒場の1、2年生に本郷の専門科目の授業やゼミを受

けさせるなど履修上の柔軟な配慮も検討している。

2013年4月1日 日本経済新聞朝刊
佐藤慎一氏(当時理事・副学長,東京大学)
聞き手:編集委員・横山晋一郎氏

求められる人材像は変わったのに、入試は逆行している。例えば、教養教育では、高校段階、大学の学部段階、大学院段階で学ぶべき内容が異なり、どれも欠かすことはできない。海外の人たちと個人的に深く付き合うには、専門以外の豊かな人間性や発想力が必要になる。それには高校での幅広い学びが重要なのに、入試優先の高校教育から欠落してしまった。

このような問題意識から、京都大学は2016年度から10学部全てで「特色入試」を導入する。

大学入試センター試験に加え、高校までに育成された学ぶ力や意欲を、各学部が固有のAP(アドミッション・ポリシー、入学者受け入れ方針)に基づき選抜する。学部ごとに、求める人材像と教育方針を明示し、それに合った受験生を受け入れる。受験生には偏差値でなく、本当に自分に合った学部を選んでもらう。

2013年11月25日 日本経済新聞朝刊
松本紘氏(当時学長,京都大学)

なるほど、「高校時代の活動や特異な能力を評価し、意欲ある多様な学生を迎えて育てたい」といった意図

による試みのようだが、ここで視野を拡げれば、同じような路線の選抜として、大阪大学の世界適塾入試、東北大学のAO入試などが注目される。またさらに時間を遡れば、モチベーションやポテンシャルが高い学生を歓迎したいと、AO入試の導入に踏み切った慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の挑戦が思い起こされよう。日本にも、いわゆる「研究大学」と称される大学群がある。定義が難しいところだが、いずれにしても以上の動きは、およそ日本の研究大学が、入学者選抜ならびに高大接続の側面で新しいステージに立ちつつあることを意味しているように捉えられる。

さて、本稿では、こうした「研究大学の選抜と高大接続」を取り上げ、そのありようを考えるための論点を提示したいと思う。経験を積みつつある研究大学の新しい入試ではあるが、いずれ迎えるであろう振り返りの時期を見据えて、見直しの論点がどこにあるのか、その洗い出しを行っておくことは大事な作業になるからだ。研究を強みとする大学という場に適した選抜とその先にある高大接続をどのように描くか。答えを探るための議論を提示したいと思う。

手掛かりとするのは、英国のオックスフォード大学訪問調査で得られたデータであり、とりわけ面接試験について得られた情報である。オックスフォード大学の入学者選抜は、「指導したい学生」を選抜するため、教員が約1万人を面接する手法を採用している。面接で問う質問もユニークなものとして知られ、その内容を紹介する書籍が出版されるほどだ(ファーンドン訳書2017)。

世界トップレベルの大学と評価されることも多いオックスフォード大学が築き上げてきた面接試験ならびに高大接続がどのようなものか。以下、次節で私たちが行った訪問調査の概要を示し、そのうえで共有すべきと考えられる論点を提示したい。なお、本稿の議論は、あくまで筆者個人の考えによるものであることを先に断っておく。

1. 訪問調査の概要

訪問調査の概要から説明する。「調査チーム」「調査日時」「インタビュー対象者」「質問項目」を並べれば、

下記のとおりである。

調査チーム

濱中淳子(東京大学高大接続研究開発センター入試企画部門 教授,当時)

高橋和久(東京大学高大接続研究開発センター入試企画部門 特任教授,当時)

小口真緒(東京大学本部入試課入試企画・広報チーム 職員,当時)

調査日時

2017年11月24日(金) 午前中

インタビュー対象者

Charlotte Hamilton氏 Student Recruitment Officer (UK and Far East)

Undergraduate Admissions and Outreach, University of Oxford

質問項目

- 1) イングランドの大学入学者選抜制度の概要
- 2) オックスフォード大学の入学者選抜の概要
- 3) 面接試験の内容について
- 4) 領域による違いについて
- 5) カレッジによる違いについて
- 6) 大学とカレッジとの関係について

など

以下では、この訪問調査から浮き彫りになる示唆について言及していくが、その前に、研究大学という枠を設定したとしても、オックスフォード大学と日本の大学にはあまりにも多くの相違点があることを断っておくべきだろう。

まず、オックスフォード大学には900年の歴史がある。しかしながら日本の大学は、明治期に創設された東京大学を取り上げたとしても、わずか140年余りの歴史しかない。教育機関としてどのような期待を担い、どのような役割を果たしているのか、両者のあいだには表現しきれない大きな差があると推察される。

そして大事なのは、こうした差が、ヒト・モノ・カネといった資源面の違いにもつながっていることだ。オックスフォード大学ははるかに恵まれた資源を有しており、潤沢な状況のなかで、教員たちは研究と教

育、そして教育の対象となる学生の選抜（面接試験を含む入試業務）にほぼ専念することが許されている。教員の多忙化が問題視されている日本の大学では考えられない状況である。

このように日本の大学とオックスフォード大学は大きく異なっている。しかしだからといって、学ぶことがまったくないということにはならないだろう。オックスフォード大学の事例という視点場を得ることで気づくことができる点もあると考えられるからだ。

ここで、本稿が注目するオックスフォード大学の面接試験について説明しておけば、「総合的に入学者選抜を判断するため一部」として位置づけられている。実際の選抜は、「パーソナル・ステートメント」¹や「GCSEの点数」や「専攻ごとに行われる筆記試験」、「受験生の出身校に提出してもらう成績・内申書」なども用いられており、「面接試験」はひとつの素材にすぎない。しかしながら他方で、パーソナル・ステートメントや成績などで絞り込んだ受験生のみが面接試験に進むことができるというプロセスから、面接こそが最終決定を下すためにもっとも重視されている試験だということもできる。

日本の研究大学における新しい入試でも、面接が重要な役割を担っているものは多い。オックスフォード大学から学べることは何か。以下、本稿では3つの論点を提示したい。いずれも素朴なものではあるが、研究大学の新しい入試のあり方を検討する際の起点になり得るものだと考えている。

2. 論点1 学部と大学当局との関係

オックスフォード大学が実施する面接試験の特徴の1つは「カレッジごとに行く」点にある。選抜に通った学生は、入学後、カレッジで展開されるチュートリアル（個別指導）を受けることになるが、その指導に耐える資質を有しているかどうかを丁寧に判断したいという考えによる²。ただ、このように可否の決定主体はカレッジにあるものの、オックスフォード大学の場合、大学当局が関わっている部分も少なくない。とくに注目されるのは、最近作成されたという入学者選抜に関する共通枠組み（Common Framework）の存在

だ。どのように面接が行われ、どのような基準で可否を判定するのかについて、すべてのカレッジが考慮するルールのようなものである。また、大学当局が教員対象の面接のトレーニングも行っており、選抜の「標準化」に向けた取り組みが見られるようになっている。

第一の示唆として提示されるのは、こうした「標準化」をどう捉えるのか、という点だ。およそ日本の研究大学の新しい入試は、各学部が「ばらばら」に選抜しているように見受けられる。大学当局の関わりもあるのだろうが、方法も多様なものが混在しており、「標準化」という状態からは程遠い大学もある。

第一の論点として「ばらばら」であることを取り上げるのは、単にオックスフォード大学との違いがみられたからという理由だけではない。「ばらばら」であることに弱点を見出すこともできると思われたからだ。2つの側面から指摘しておきたい。

選抜する側にとっての弱点

■導入からしばらくの期間に経験するであろう試行錯誤、そしてその意味するところを、学部間で共有することが難しい。

選抜される側にとっての弱点

■進学する学部について迷いがあっても、方法がばらばらであれば、領域の特性よりも、方法に左右される選択（出願学部（学科）の決定）にならざるを得ない。

加えて、あまりにも「ばらばら」であると、制度としてのイメージが捉えづらくなり、高校生がどのような方法で大学に進学しようかということを検討する際の選択肢から抜け落ちやすくなってしまいかもしれない。

急いで補足すれば、オックスフォード大学の標準化も、領域間を跨ぐ徹底的な調整を試みるといった類のものではない。おそらく、領域「内」をまとめることを主要な目的としたものであり、カレッジ間の調整を促すためのものだと推察される。たとえば、人文系にアプライした受験生と自然科学系にアプライした受験生

は、同じように応募書類を出し、同じような選抜プロセスを経験することになるが、同じような方法で面接されたり、同じような基準で合否が判断されたりするわけではないはずだ。にもかかわらず、ここでオックスフォードから学ぶ示唆として「標準化」という視点をあえて挙げるのは、たとえば、理学部や農学部、工学部といった比較的近い領域であっても、課している要件や選抜方法が大きく違うという実態が、日本の研究大学では確認されるからである。

研究大学はその性質上、学生の多様化という点を重視する。しかしながら「多様な学生を取るために望ましい方法」が「多様な方法」というわけでもないだろう。上記の弱点をもたらす問題点を避けるためにも、また、方法がもたらす縛りを解くためにも、そして制度としての力強さを持つためにも、大学当局を中心としたある程度の標準化——「メタレベル」とでも表現され得る標準化——の可能性を吟味する意味は小さくないと考えられる。

3. 論点2 面接で何を問うのか

日本の研究大学が試みている新しい入試の面接で何が問われているのか。その内実は基本的に秘匿とされるところが大きい。インフォーマルなかたちでの情報収集も含め、およそ「高校時代の経験」を深く聞くスタイルが多くのところだとされているようだ。何について学んだのか。なぜ、それを学ぼうと思ったのか。そしてどのような行動をとったのか。たとえば2016年7月に京都大学の特色入試のねらいが語られた次の記事も参考になろう。

重視しているのが、高校と大学の勉強をつなぐ「高大接続」です。高校で取り組んできた課題解決型の学習や課外学習などを(出願書類で)報告してもらい、面接で話してもらうことを通して、こうした学習が大学での勉強につながっていると知ってほしい。

2016年7月10日 高校生新聞ONLINE
北野正雄氏(当時理事・副学長,京都大学)

ところが他方で、オックスフォード大学の面接試験では、「高校時代の経験」が問われることはほとんどない。いわゆる「考えさせる」「哲学的な」問いが提示され³、その問いにどう取り組むのか。どのように答えを導こうとし、そのプロセスのなかでどのような質問を教員に投げかけるのか。こうしたことを確認しながら合否が決められているという説明を受けた⁴。

片や「高校時代の学びをめぐる経験」を問い、片や「目の前にある課題への取り組み方」を問う。こうした違いについては、次のように捉え直すことができるのではないだろうか。つまり、日本の研究大学では、受験生がいかに主体性を備えた学習者であるのかを知りたくて「高校時代の学びをめぐる経験」を面接で聞いている。対して、オックスフォード大学の面接試験では、受験生が教えたいと思う学生になり得るかどうかが知りたくて「目の前にある課題への取り組み方」を聞いている。そしてこのような違いが現れる背景には、両大学の教育体制の違いというものがあるように思われる。

先にオックスフォード大学の体制から記せば、教育の柱をなしているのは、各カレッジで展開されるチュートリアル(個別指導)である。学生たちは毎週1つのレポートを作成し、教員1人に対して学生2~3人という状況のなかで指導を受ける。徹底したトレーニングであり、学生の主体性が大きな前提になるようなものではない。

他方で日本の研究大学の教育は、学生の主体性を前提にしているところがある。大人数授業がそれなりのシェアを占める現状でいかに成長するかは、勢い各学生の取り組みに左右される。また、各大学で用意されているプログラムには、「自ら動く者であれば、得られる機会」になっているものが少なくない。東京大学が公表する「期待する学生像」に「東京大学が求めているのは、本学の教育研究環境を積極的に最大限活用して、自ら主体的に学び、各分野で創造的役割を果たす人間へと成長していこうとする意志を持った学生です」と記されているのも象徴的だ。面接試験で受験生に「いかに主体性を備えた学習者であるのか」を問うのは、きわめて合理的な判断だといえるようにも思われ

る。

しかし、急いで指摘しておきたいのは、これが「本当に望んだ姿」なのか、という問いである。新しい入試を設計したのは、もっと教育を活性化したかったからなのではないか。やや斜に構えた見方をすれば、新しい入試で、主体性を確かめることに重きを置いた面接が展開されているのは、いまだ研究大学の教育が従来のものからたいして変わっていないか、実態として路線を見直すところまで切り込めていないか、そのいずれかの段階でとどまっているからなのではないか。

誤解を避けるために断っておけば、「主体性をみる面接試験」と「目の前の課題への取り組み方をみる面接試験」のどちらが望ましいということがいいわけではない。言及したかったのは、面接試験で問うべき質問は、入学以降の教育のあり方とセットで考えられるべきであり、これまでどれほどこの点に自覚的だったのか、という点である。述べるまでもないポイントかもしれないが、ともすれば看過されがちな点だといえるように思う。

4. 論点3 中等教育機関(高等学校)との関係

ところで、オックスフォード大学の入学者選抜と日本の入学者選抜との比較という作業は、荻谷(2012)にもみることができる。荻谷によれば、オックスフォード大学では「主観的に「顔の見えるエリート」を選び出し、「教育された市民」を育て上げていこうとしているのに対し、日本のトップ大学は徹底して受験生を匿名化し、「顔の見えない大衆」として学生を選抜しているところに特徴がある。

周知のように、日本の大学入試はなによりも「公平であること」を重視してきた。それゆえの匿名化だが、ここで第三の論点として挙げたいのは、公平性重視の姿勢が「各高等学校との距離」にも現れているのではないかと、ということである。もちろん日本の研究大学も、新しく導入した入試の説明を行っている。全国で展開している説明会やウェブなどを通じての発信を目にする機会も少なくない。ただ他方で、オックスフォード大学はその先を行っているようなのだ。訪問

調査では、「中等学校と密に協力して生徒たちの面接準備のサポートをしている」という話も出た⁵。さらに興味深かったのは、中等教育の内容に対する信頼について語られた部分だ。論点2で触れた「『考えさせる』『哲学的な』質問はかなり難しいものだと思われるが、受験生はどれほど答えられるものなのか」という問いを投げかけたところ、「英国の中等学校では批判的思考力、知的柔軟性、討論能力が育まれる教育が展開されているので問題ない」と断言する趣旨の発言が返ってきた。

オックスフォード大学の面接試験は、中等学校との「密なやりとり」と「十分な信頼」のうえに成り立っている。そしてこうした状況こそが、英国における研究大学の高大接続を支えている。翻って日本の研究大学の場合はどうか。密なやりとりというよりも、情報提供が中心の関係を築いているに過ぎないということはないか。相手(高等学校)のことをどれほど理解できているといえるのか。「信頼」以前の状況になっていることはないか。

振り返ると、日本の高大接続改革は、およそ大学に進学する高校生たちが困らないような施策を、高等学校と大学がそれぞれ講ずるという展開をみせてきたといえる。接続は、生徒(学生)個人のなかで起きるものであり、高校や大学、教育関係者はそれを支える存在だというロジックだ。対して、訪問調査結果を踏まえる限り、オックスフォード大学の高大接続は、高校と大学、大人たちの間でまずは生じているものだという印象を受ける。

仮に、大人たちの支えなくとも自分の中で「接続」を作り上げることができるような強い学生が欲しいというのであれば、現状のままでもいいかもしれない。しかし、今後の受験生のため、受験生を送り出す高等学校のため、そして新しい入試を利用してこれまでとは異なるタイプの学生に入学してもらうことに挑戦し始めた研究大学のために、高等学校との関係性について問い直しておくことも必要ではないか。研究大学の入学者選抜は社会的注目度が高いトピックであり、だからこそ公平性を強く意識しなければならないが、以上は遠くない将来に取り組まなければならない課題である

ように思われる。

おわりに

研究大学における新しい入試の経験はまだ浅い。導入の意味がみえてくるまでしばらく時間がかかるだろうし、改革に向けた見直しをするには尚早であるように思われる。ただ、見直しのために必要な手掛かりを集めておくことは、いまからでも始めておくべきことであろう。その際、比較という作業はおおいに役立つ。その対象があまりに違う環境にあったとしても、切り口の設定次第で浮き彫りになる発見はある。そしてたとえば米国の大学と比較したときにみえてくる発見と、アジアの大学と比較したときにみえてくる発見とは大きく違う。

ヒト・モノ・カネといった資源面をめぐる検討を続けると同時に、自らを相対化し、改革への多様な道筋を描く準備をしておく。改めて言及するまでもないことだが、新しい大学入試を「強く」していくためには、こうした地道な作業を蓄積することがなにより重要である。本稿は、そうした試みのひとつとして位置づけられると判断している。

【文献】

ファーンドン、J. 2017『オックスフォード&ケンブリッジ大学 世界一「考えさせられる」入試問題——「あなたは自分を利口だと思いますか?」』小田島恒志・小田島則子訳、河出書房新社。

荻谷剛彦 2012『イギリスの大学・ニッポンの大学——カレッジ、チュートリアル、エリート教育』中央公論新社。

【注】

1 専攻に対する興味やそのコースを学びたいと思うに至った学校外での個人的活動などを4000語で説明するものであり、オンラインで高等教育入学申請機関UCASに

提出することになる。なお、受験生は提出時に受験するコースと大学を5つまで申請することができる。そしてこのパーソナル・ステートメントは申請した大学すべてに送られ、各申請先は同じものを読むことになる。

2 なお、受験者は、2つのカレッジに申請して両方の面接を受けることもある。その場合、可否の判断は、カレッジ内の議論の中で決定されるという。

3 オックスフォード大学のウェブサイトには、面接で出された質問の例が掲載されている。そのいくつかを紹介すれば、次のようなものである。

Biological Sciences

◆ Why do some habitats support higher biodiversity than others?

◆ Why do many animals have stripes?

◆ Here's a cactus. Tell me about it.

Engineering

◆ Place a 30cm ruler on top of one finger from each hand so that you have one finger at each end of the ruler, and the ruler is resting on your fingertips. What happens when you bring your fingers together?

◆ How would you design a gravity dam for holding back water?

History

◆ What would a historian find interesting about the place where you live?

◆ Is violence always political? Does 'political' mean something different in different contexts?

Philosophy

◆ What exactly do you think is involved in blaming someone?

Psychology

◆ A large study appears to show that older siblings consistently score higher than younger siblings on IQ tests. Why would this be?

◆ What is 'normal' for humans?

4 インタビュー対象者Charlotte Hamilton氏の説明によれば、英国でもオックスフォード大学以外の大学の面接では、たとえば学校の物理の授業で学んだことが何だったか、そしてどのように感じたかなどを話すことが求められるという。こうした言及があったうえで、やはり「オックスフォードでの面接はまったく違う。オックスフォードではこのようなことは聞かない」と述べていた。

5 また、オックスフォード大学の説明によると、ウェブサイトには面接準備方法など多くの情報を掲載し、当然のように、過去の面接で使われた質問も公開されているという。

Articulation between High Schools and Universities for Research Universities : From a Research Visit to Oxford University

※ Junko HAMANAKA

[Abstract]

In the past, the main method used by Japanese research universities to select new entrants has been a written examination to test scholastic ability. In recent years, however, new selection methods, such as the screening of application documents and interviews have been introduced. What points should be borne in mind to make the new selection procedures appropriate for research universities? This study discusses this question based on suggestions gained from a research visit to Oxford University, which has a strong reputation for student selection by interviews. Concretely, three points are examined: 1) How should we view the relationship between the faculty and the university authorities? 2) What is to be assessed in interviews? and 3) What kind of relations should be built with high schools?

※ Professor, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University